（からだ）と（わからなさ）を翻訳する

めとてラボ ＋ ジョイス・ラム

だれもが文化でつながるサマーセッション2023「パフォーマンス×ラボ」の実験

はじめに

「情報保障」という言葉を知っていますか？情報保障とは「年齢や障害の有無等に関係なく、誰でも必要とする情報に簡単にたどり着け、利用できること」*を言います。では、芸術作品の情報保障と言うとき、あなたはどのようなものを思い浮かべますか？例えば、ろう者や難聴者の場合には手話通訳付きガイドや文字ガイド、盲者の場合は音声ガイドや作品に触れるワークショップなどを想像した方も多いでしょう。情報保障には、それぞれ鑑賞者が使う言語やニーズに対応したさまざまな手法があります。また、映画の日本語字幕や吹き替えなども聴者を対象とした情報保障のひとつです。

2023年7月29日〜9日までの6日間、東京都美術館で行われたクリエイティブ・ウェルビーイング・トーキョー「だれもが文化でつながるサマーセッション2023」の企画のひとつとして、芸術作品を伝えるための情報保障について考える公開研究ラボ「パフォーマンス×ラボ」を実施しました。この企画は、アーティストのジョイス・ラムによるレクチャーパフォーマンス作品《家族に関する考察のトリロジー》（2021-2022年）に対して、どのように情報保障をつけることができるのかをアーティストと共に実験するというもので、協働パートナーとしてめとてラボが一緒に取り組みました。

めとてラボは、視覚言語（日本手話）で話すろう者や難聴者、ろう者の両親をもつCODA（コーダ）、聴者たちが協働して展開するアートプロジェクトです。一人ひとりの感覚や言語を起点とした「創発の場＝ホーム」をつくることを目指し、目と手で語らいながら幅広いリサーチや実験を行っています。

「パフォーマンス×ラボ」の実施にあたって、はじめは、作品の音声情報を文字化・手話通訳するという情報保障を設計することで、文字通り「情報」を「保障」しようと考えていました。しかし、作品を繰り返し鑑賞し準備を進めるなかで、めとてラボメンバーはジョイス自身が「3.5言語」を持つこと、それらの言語から生まれる思考や話し方、言語表現の曖昧さ、身体性といった、言語化できないようなさまざまな表現技法を用いて制作しているのだと気づいたのです。

芸術作品の情報保障は、単なる情報を言語的に補完し伝えれば良いというものではなく、作品解釈とそれを伝えていくための「翻訳」という行為が必要なのではないか。しかも今回は、作品の内容や言語だけでなく、それらの背景やアーティスト自身の身体性に対する翻訳も必要となる。そうでなければ、この作品の情報保障は成立しないのではないか。こうした仮説と課題感をわたしたちは準備段階から感じていました。だからこそ、もう一歩先の情報保障の在り方を模索してみようと、「パフォーマンス×ラボ」に挑みました。

本書は、ジョイスの作品の情報保障をどのように構築していったかのプロセスと気づきを記録したものです。ジョイスの作品をはじめて鑑賞した準備段階の様子（Day0）から、「パフォーマンス×ラボ」の6日間の活動記録（Day1〜Day6）やコラムなどが収録されています。

芸術作品の情報保障に明確な答えがあるわけではありません。芸術作品の情報保障とは、試行錯誤しながらつくりあげていくこと。その面白さ、難しさ、奥深さ、そして可能性を「パフォーマンス×ラボ」を通してわたしたちは感じています。本書が、「芸術作品の情報保障とは何か」を考えるきっかけになればと願っています。

めとてラボ

*東京都福祉局ウェブサイト「情報提供の方法（情報保障）」より
https://www.fukushi.metro.tokyo.lg.jp/tokyoheart/jouhou/index.html

「だれもが文化でつながるサマーセッション2023」とパフォーマンス作品について

クリエイティブ・ウェルビーイング・トーキョー

「だれもが文化でつながるサマーセッション2023」

“アクセシビリティと共創”をテーマに、トークセッションやレクチャー&ワークショップ、作品展示を展開し、芸術文化をすべての人が楽しめる社会を実現するために、“新たなコミュニケーションのあり方”や“誰もが楽しめる鑑賞体験”について共に考えるプログラムを開催した。本書で取り上げる「パフォーマンス×ラボ」は、その一環として行われた。

会期：2023年7月29日（土）～8月6日（日）
会場：東京都美術館（講堂、ロビー階 第4公募展示室）
主催：東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京

《家族に関する考察のトリロジー》2021-2022年

レクチャーパフォーマンス、映像（42分26秒）

多くの国では法的に定める「家族」の関係性は結婚でしか獲得できない。社会学で「家は近代の発明だ」と論じられるように、わたしたちが持っている理想の家族像は各国の法律をはじめ、地域的・文化的制約などによってつくり上げられ、制限されている。
「家族に関する考察のトリロジー」は家系図を用いてさまざまな「家族の定義」を考察するプロジェクトである。その実践を通して、複雑な家族関係を図式化し、対象化していく。約43分のレクチャーパフォーマンスは、家族研究をはじめ、文化人類学、日本の観光の歴史など、さまざまな分野と視点を横断したリサーチから抽出した「月」「木」「火」のモチーフを中心に三部作として構成している。日本語、英語、広東語、中国語で上演／上映するが、言語が混沌としている台本を読み上げる身体を通して、不確実なアイデンティティを表現する。

構成・演出・出演・映像：ジョイス・ラム
アニメーション：高橋杏子／音楽：石田多朗
PA：桒原幹治

パフォーマンス×ラボ

芸術作品を伝えるための情報保障について考える公開研究ラボ。ジョイス・ラムのレクチャーパフォーマンス作品《家族に関する考察のトリロジー》（2021-2022年）の「第一部：月編」を題材に、アーティストと「めとてラボ」が協働して作品の情報保障の在り方を探求。最終日（8月6日）には、検討した手法を反映したレクチャーパフォーマンスを上演した。

パフォーマンス×ラボの軌跡

これまでにない情報保障の在り方を見つけるためにはどうすればよいのか。めとてラボメンバーと議論を重ねるなかで、わたしたちの議論や思考プロセスそのものを「パフォーマンス」として位置づけ開くことで、新しい情報保障の実践の風景を共有できるのではないかと考えました。そして、この実践を通して、アーティストとめとてラボの相互の思考や感覚に何か新たな影響が生まれるかもしれない。そんな思いを持ちながら準備がスタートしました。

メンバー：めとてラボ（井戸上勝一、大高有紀子、勝野崇介、佐藤晴香、南雲麻衣、那須穂、根本和徳、保科隼希、牧原依里、和田夏実、嘉原妙）、ジョイス・ラム
手話通訳：井上歩、小野志都乃、小松智美、瀬戸口裕子、村山春佳
※「パフォーマンス×ラボ」は8月1日（火）～8月6日（日）の期間に実施

パフォーマンス×ラボ 6日間の軌跡

芸術作品の情報保障とは？
わたしたちの議論と試行錯誤の道のりをご紹介します。

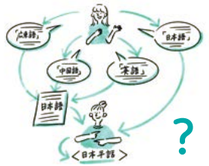
DAY 0

→p.6

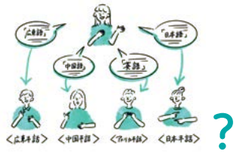
ジョイスの作品を見て、ろう者・聴者・手話通訳者のそれぞれの意見を出す

広東語、日本語、英語、中国語の翻訳をどうするか

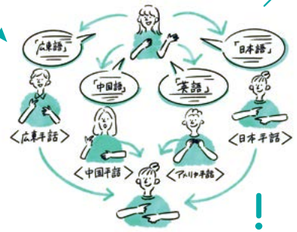
（方法1）
すべて日本手話にする



（方法2）
それぞれの言語を手話通訳する



（方法3）
一人の人がそれぞれの言語を手話で話す



ろう俳優、アメリカ手話、広東手話、中国手話の翻訳者を探し、依頼する

DAY 1

→p.10

ジョイスの生い立ちを知る

作品内の言葉を知る

「家族」の定義を再確認する

DAY 2

→p.11

言語を探して

①広東手話と中国手話

②手話の変遷

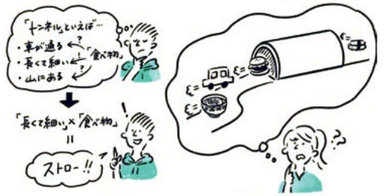
③複数の言語を行き来するわたしたち

誠実な翻訳とは？

DAY 3

→p.12

音声言語、視覚言語の違いを理解する



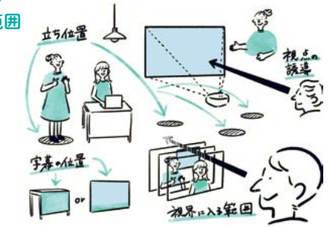
漢字の読み方の違いを手話で伝える

DAY 4

→p.14

情報の優先順位を決定する

位置を決定する
①視界に入る範囲
②字幕の位置
③立ち位置
など

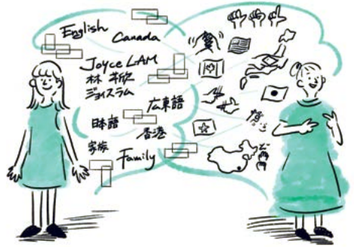


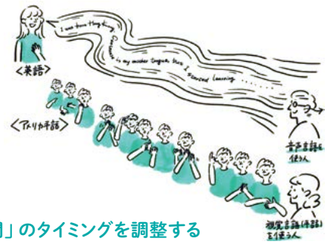
作品表現を活かした情報保障を考える

DAY 5

→p.16

ジョイスの身体性を忠実に表現する





「間」のタイミングを調整する

DAY 6

→p.18

レクチャーパフォーマンス本番

DAY 0

パフォーマンス×ラボに向けての準備

誰とどのように翻訳に取り組んでいくのか。まずは作品を鑑賞し、その方法を検討することからはじめました。

Step.1 準備段階での情報保障と議論の進め方

レクチャーパフォーマンス《家族に関する考察のトリロジー》の収録映像を鑑賞する時点から情報保障の検討がはじまります。
めとてラボには、ろう者、CODA、聴者、手話通訳者と多様な立場のメンバーがいるため、最低限の情報保障として以下の方法をとりました。

- YouTubeの字幕（自動文字起こし）
- 字幕の誤字脱字や情報の抜け漏れの際の手話通訳による補足

映像の鑑賞後、気づいたこと、わからないこと、気になったことを付箋に書き出して感想や意見が重なる部分をカテゴライズし、それをもとに作品の内容や情報保障について議論を深めました。

ろう者の意見

- 共感のタイミングがずれてしまう
- 映像の下の部分に字幕があると映像と交互に見るので、視線の移動が大きくなってしまう。その字幕がない方が集中して見られる
- 視覚情報が多く、かえってわかりにくい。コンテクストの違いや文化を知っている、知らないの違いがある

聴者の意見

- 場面によって明るく話すところと、少し暗い雰囲気で話す部分があった（声のトーンが違う）
- 最初、理解できない言語だったが、途中、英語の音声と字幕が出てきたので少し内容が理解できた
- 異なる言語を使い分けながら少しずつ情報が追加されて、だんだんと理解できるようになるこの感覚をどう情報保障をすることができるのか

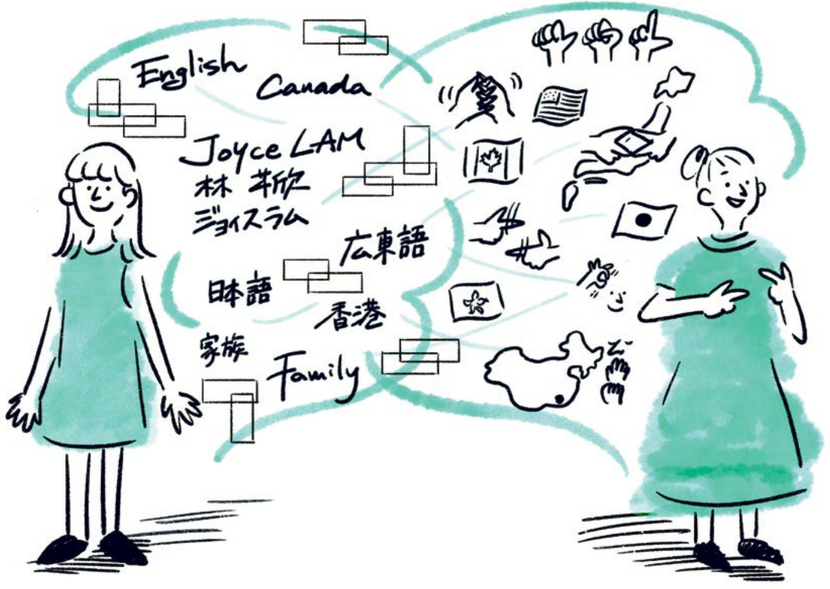
手話通訳者の意見

- 曖昧さがあった。それをどのように伝えるか気になった
- 照明にも意味があるのか
- 通訳する上で言語の意味を把握することは必要なので、事前に意味を知ることができるとよい

Step.2 「作品の曖昧性」をどう伝えるか

ジョイスは作品のなかで、広東語、日本語、英語、中国語*を使い分けながらパフォーマンスをしています。ジョイスが話している言語や言葉のニュアンス、曖昧さも含めてそのままに伝達する方法を取るか、言葉の意味を理解し、翻訳・解説するような形で情報保障をするのかによって作品体験が大きく変わってくると考えました。つまり、すべてを日本手話に訳すのではなく、「情報はあるがわからない」「なんとなくわかる」といった状況をつくることが、この作品の意味やアーティストの意図を伝える情報保障になると思ったのです。
多言語による「わかる／わからない」、ジョイス自身がまとう空気感といった「曖昧性」をどうすれば伝えることができるのか。わたしたちの探求がはじまりました。

*ジョイスは、自身の言語について「3.5ヶ国語」という呼称を使う



Step.3 情報保障の難しさと設計に必要な作業時間について

情報保障に取り組むためには、誰がどのように関わりをつくるのかという環境構築について整理する必要があります。伝えたいもの（作品やトーク、伝え手）を誰に（受け手にどのような方がいるか）どのように（伝える方法・メディア：手話通訳、要約筆記、音声ガイドなど）届けるのかを確認して、最適な方に依頼すること。そして、事前準備として、伝えたいものへの理解をそのチームでできる限り深めていくことが必要です。環境構築の方法と、依頼の変遷、練習を含む作業時間、その膨大さをこの取り組みを例に感じていただけたら幸いです。

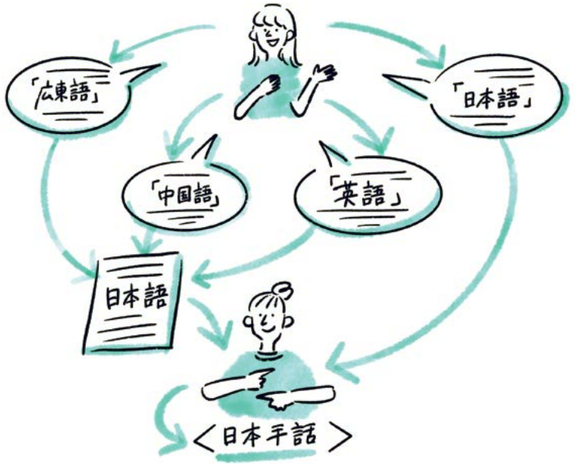
Step.4 3.5ヶ国語の翻訳方法

作品のなかで用いる4つの言語に対して、ジョイスは「3.5ヶ国語」と表現します。そこには、広東語が言語として認められず方言のひとつとみなされてきた歴史的背景と、日常生活における主要な言語ツールとして中国語を使用したことがないジョイス本人の経験から広東語／中国語を「0.5ヶ国語」と位置づけている背景があります。日本語話者のオーディエンスを想定してつくられ、広東語の語りから幕を開ける本作品では、“わからなさ”に出会うところから鑑賞体験がはじまります。そしてこの“わからなさ”に出会うことが、今回の情報保障を検討するキーワードとなりました。

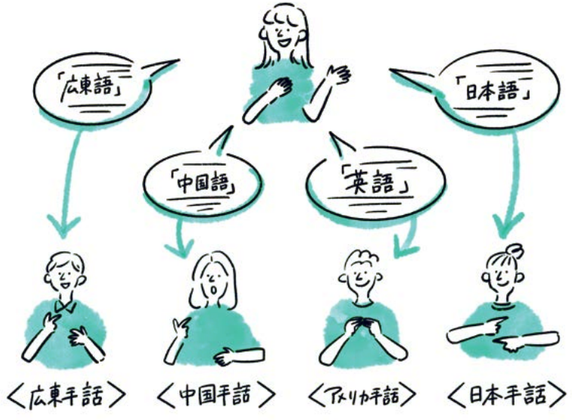
また、日本語と似ている漢字や音声があることで、わかるような気がする感覚にも陥ります。このような言語間の共通点は手話表現においても垣間見えることがあり、文化や歴史が言語に影響を及ぼしていることを再認識することとなりました。

本冊子では日本語、英語、広東語、中国語それぞれを手話に翻訳したため、広東語については「広東手話」と表記しています。香港の手話は「広東語」という音声言語から発展させたものではなく、その場所に存在するろうコミュニティが自らつくり上げるものとして、「香港手話」「澳門手話」「台湾手話」のように、「（場所名）＋手話」と表現する場合もあります。

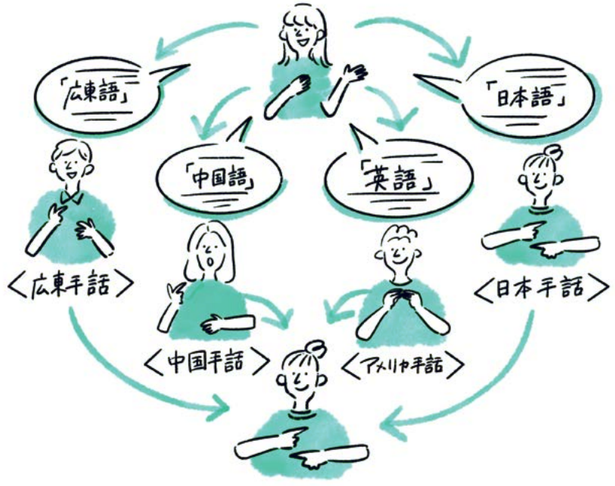
「家族」の日本手話と広東手話の共通点と違い



（方法1）3.5言語をすべて日本手話に翻訳する



（方法2）3.5言語のそれぞれの手話通訳（広東語⇆広東手話通訳、中国語⇆中国手話通訳、日本語⇆日本手話通訳、英語⇆アメリカ手話通訳）をつける



（方法3）手話を第一言語とするろう者の俳優が、広東手話、中国手話、アメリカ手話を監修のもとそれぞれ覚え、作家の身体に合わせて複数言語をひとりで翻訳する

Step.5 プロセスの視覚化の工夫

議論の内容を視覚化し、進行をスムーズにするための工夫としてグラフィックレコーディングも取り入れました。手話で議論する場合、話している内容を見ながら書くことが必要なため、「透明ボード」を開発・制作しました。

パフォーマンス×ラボの議論に使用した透明ボード

議論の結果、ジョイスの3.5ヶ国語を体現するために、「手話を第一言語とし、外国手話も使用した経験をもち、なおかつ、それぞれの手話言語のトーンやリズムの違い等も表現できる人であること」という条件のもと、ろう者の俳優・河合祐三子に出演を依頼し、広東手話、中国手話、アメリカ手話、日本手話を用いて、パフォーマンスを行うジョイス自身を表現するという演劇的な方法（**方法3**）を取ることにしました。

各言語の手話の監修は、以下の方々へ協力依頼をしました。

- 広東手話への翻訳は、ジャーシン・マイ
- 日本手話への翻訳は、ろう俳優の河合祐三子
- アメリカ手話への翻訳は、アメリカ手話講師のジョセフ・デービス
- 中国手話への翻訳は、施 葉飛

*本来、言語の習得には長い時間を要します。今回は「一人の身体で言語が移り変わる」体験を優先し演じる形を取りましたが、日本手話にあるうなづきが他の国にはなかったり、口形（マウス・ジェスチャー）が異なるなど、言語に含まれるさまざまな要素を表すこともまた困難さを極めました。

DAY 1 言葉の意味と翻訳

ジョイスとめとてラボの初対面。まずはジョイス自身を知ることからはじまりました。

Step.1 名称の確認

特に作品の翻訳には、作家自身がつけた名称や専門用語などが多数あり、それぞれに意味を組みとり手話の表現を作成する必要があります。例えば、ジョイスの名前が「たくさんの喜び」を意味していることから、ジョイスの名称表現は手話で「嬉しい」を表す両手を胸下で上下に振る動きに決めました。

Step.2 作品制作の背景

ジョイスは、香港、カナダ、イギリス、日本と各地での生活から「ホーム」や「家族」とは何かという問いを持っていました。コロナ禍で自分の表現手法を探求するなかで、大学院の授業で家族を考察するために家系図を書く指示書をつくったことをきっかけに本作品が生まれたと言います。

Step.3 作品内の言葉の意味

作品を翻訳するためにキーワードとなりそうな言葉や、ジョイスの経歴、気になる言葉の意味を深掘りしていきました。特に作品の随所に出てくる聞き慣れない言葉や意味を知ることは作品の捉え方に大きく影響があると感じました。

作品内に出てくる言葉の例

- **「トリロジー」**…直訳すると「三部作」。本作品は内容によって言語を使い分けるため、トリロジーという英語表記がしっくりきた。
- **「チャイニーズ」と「香港人」**…「チャイニーズ」は国籍・民族であり「香港人」はアイデンティティとしての表現。ジョイスは自身のことを香港人と言う。
- **“月にいるわたしは、日本の「外国人・宇宙飛行士」”**…地球上には国が存在するが月には国としての隔てがない。だから、月に行けば国籍は関係なくなる。しかし、あえて「外国人宇宙飛行士」という言葉を使うことによりナンセンスさを表現している。

“作品を翻訳する”という視点に立つと、こうした確認は必要なプロセスだと考えます。なぜなら、本作品は、ジョイスの身体性（自身のなかにある言語の割合やアイデンティ）に直結しており、それ自体を翻訳しなければ情報保障が十分ではないからです。

Step.4 「家族」の定義とそのイメージ

日本、中国、アメリカ、各国の「家族」の定義とその違いについて理解を深めました。中国や日本では、夫婦の配偶関係や親子・兄弟などの血縁関係によって結ばれた親族関係を基礎に成立する小集団を家族と定義していることに対して、アメリカ航空宇宙局（NASA）では、血縁関係ではなく自分で選択した配偶者が家族として優先されると定義づけています。同じ「家族」という言葉でも意味やイメージが異なることから、それらの表現方法にも工夫が必要なのではないかという議論がありました。このような気づきが作品を本質的に翻訳すること、そして作品に対する敬意へとつながります。

DAY 2 複数の言語をどう見える化するか

広東語、日本語、英語、中国語の言語をどのように翻訳し、複数言語の存在を手話として可視化できるのか。手話の歴史的背景などもジョイスに共有しながら議論を重ねました。

Step.1 言語を探して

広東手話と中国手話

中国語圏において広東語はひとつの方言とされていることを本作でも扱っているのと同様、広東手話を探すプロセスもまた困難を極めました。中国のろう者に広東手話について聞いていくと、多くの方が中国手話と広東手話は同じだ、と言うのです。今回、世界ろう者会議*にて出会った、広東手話の研究者に協力を仰ぐことができ、中国手話と広東手話はおおよそ50%程度が異なっているとの見解をいただきました。そこで、その方に広東手話への翻訳、手話動画の収録・作成を依頼しました。

*世界ろう連盟が主催し、世界各国における聴覚障害者に関する研究集会を、4年に1回開催している。2023年は韓国の済州島で開催された。

手話の変遷

音声言語は植民地化と共にさまざまな変遷を辿りましたが、手話もまた、植民地化の際に創設されたろう学校での指導者の影響と現地の文化や語彙の影響を相互に受けながら、普及していきました。ろう学校やろう者のコミュニティが自然言語の創発を支え、音声言語とはまた異なる発展をしています。

参考：Julie Bakken Jepsen, Goedele De Clerck, Sam Lutalo-Kiingi, William B. McGregor (Eds.) Sign Languages of the World (2015)

複数の言語を行き来するわたしたち

めとてラボでは、手話が第一言語、日本語が第二言語のろう者メンバーと、日本語を第一言語とする聴者メンバーがいるため、話し合いの場では手話通訳を介して話をします。メンバーの多くは、手話と日本語のふたつの言語を行き来しながら生きており、本作品のなかに出てくる複数言語にまつわる体験など、メンバー各自の経験と重なる部分が非常に多くありました。

Step.2 誠実な翻訳とは

言葉の翻訳に関することと同時に議論になったのが、「翻訳の誠実さ」についてです。一人ひとり、第一言語が何か、どんな言語を習得しているのかなど、その人の過去の経験によって表現の感覚は変わります。ジョイスの言語感覚や身体性を正確に翻訳するには、ジョイスと同様の言語感覚（同じレベルでの3.5ヶ国語）が必要ですが、今回、ジョイスとも異なる言語背景を持つ河合*や鑑賞者がいる状況において「誠実な」翻訳とは何か、情報の正しさとはいったい何かということを考えていくことになりました。

*P.9を参照

DAY 3

作品の文化的背景をどう伝えるか

言語の「音」の微細な違いをどのように視覚的に表現するのか。
音声言語と視覚言語の想起するイメージの違いなども共有しながら議論を進めました。

Step.1 異なる読み方の漢字

作品のなかで、漢字は同じでも読み方の音が異なるものについて説明するシーンがあります。これは、読み方は異なりつつも日本語と広東語の音が似ていることを伝えたかったからだとジョイスは言います。こうした読み方の音の違いをどのように手話に翻訳し表現するのか、以下のように検討を重ねました。

音が似ている言葉の例

- **「旅行」**…日本語（りょこう）、広東語（ロュイハン）

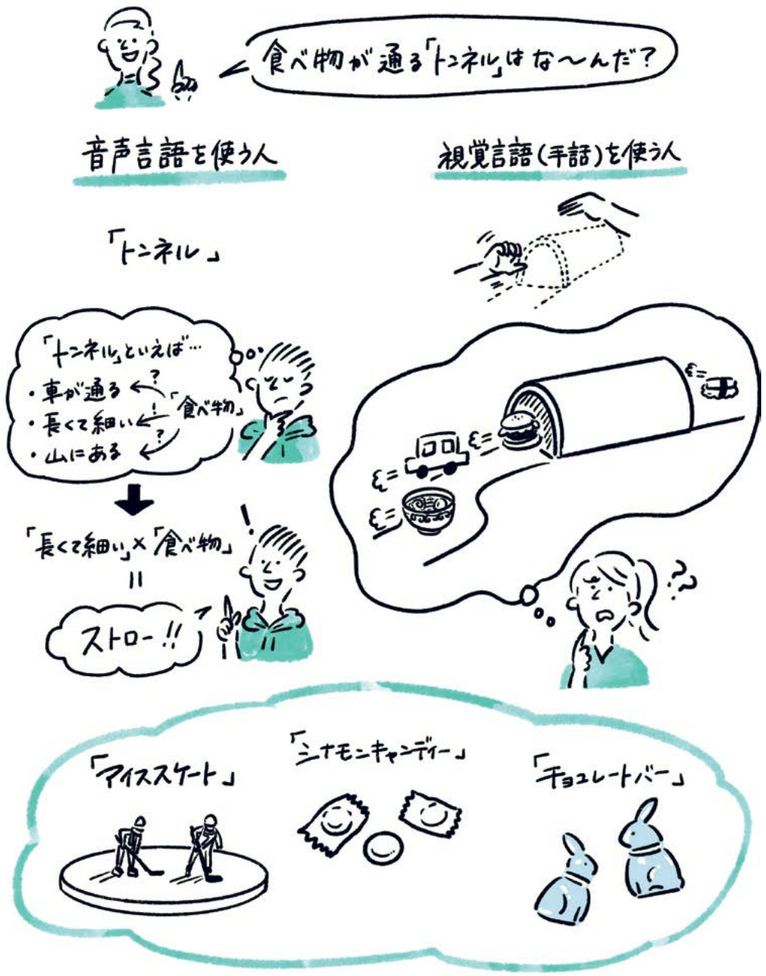
翻訳方法の検討例

- 広東手話、日本手話でそれぞれを表現する方法
- 広東手話のみ表現する方法
- 音の違いを表現するために日本手話の指文字で「りょこう」「ロュイハン」と表す方法

検討の結果、今回は、スライドに表示される漢字に「ロュイハン」とルビを振り、手話は広東手話にすることで、漢字の読み方の音の違いを表すことに決まりました。

Step.2 音声言語と視覚言語の想起するイメージの違い

音声言語と視覚言語（手話）にはどのような違いがあるのか。それぞれの言語から想起されるイメージの違いと、そのために必要となるそれぞれの情報について共有し議論を深めました。例えば、「トンネル」という言葉。音声言語の場合は、「トンネル」という音に紐づくラベルがあり、そのラベルからの想起によってイメージを共有し言葉を紡いでいきます。音声言語のなかで生まれたなぞなぞでは「食べ物が通るトンネルはなんだ?」という問いに対して、トンネル=「長くて細い、車が通る、山にある」のようにラベルに紐づく言葉が想起され、そこから「長くて細い」×「食べ物」=「ストロー」と答えが導き出されます。
一方、視覚言語の場合は、トンネルのイメージを図像的に表すため、実際に、目の前に車が通るトンネルが置かれているような形で表現しイメージを共有します。そのため、トンネルと食べ物が結びつくことは難しく、このなぞなぞは成立しません。視覚言語である手話は、イメージを具体的に表すことが必要な言語なのです。
そのため、今回も、作品のなかに登場するジョイスが幼少期に通っていた「スケートリンク」の大きさや食べていた「チョコレートバー」の実際の形など、ジョイスの記憶と翻訳とのイメージを擦り合わせていきました。



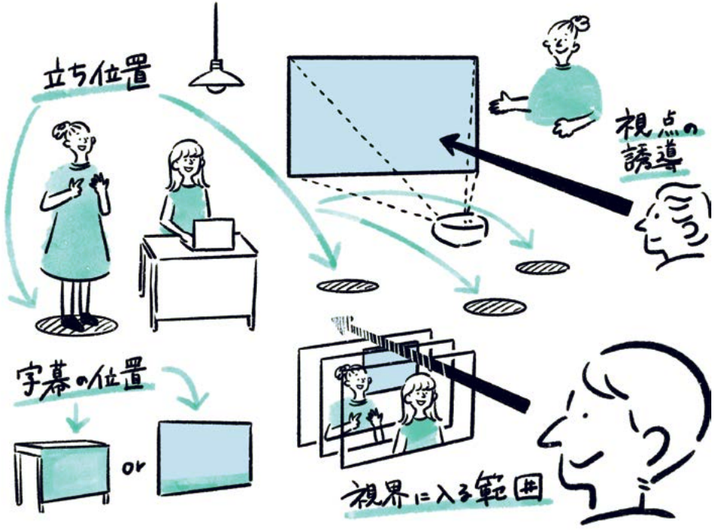
DAY 4

場の設計と表現の翻訳

**最終日のレクチャーパフォーマンスに向けて、
情報保障を踏まえた空間構成やパフォーマンス表現の翻訳方法などを検討しました。**

情報の優先順位

情報保障に取り組む上で大切なことは、「見る人がどんな情報を必要としているか」という具体的な想定です。この日、めとてラボのろう者3人と作品鑑賞の情報の優先順位について意見交換したところ、「ジョイスの身体」「映像」「会場全体」と、それぞれ異なる視点があがりました。
聴者は映像と音声が互いにクロスオーバーしながら同時に情報を受け取っていますが、ろう者は、手話→映像→手話→映像と視点を移動させながら情報を受け取っています。そのため、個人によって情報の優先順位が異なってくることがあります。3人からあがった優先順位の要素をうまく取り入れながら、ジョイスの身体（言葉）と映像の情報を同時に受け取れるよう情報保障の場の設計を工夫しました。



1. 視界に入る範囲

スクリーン、椅子、照明を用いながらジョイスがレクチャーパフォーマンスを行う作品。スクリーンには映像や字幕が表示されます。それらの情報とジョイスの身体、ろう俳優の河合が一体となって見えるようにし、ジョイスの身体性を感じられるような空間構成を考えました。ジョイスと河合は隣り合うように位置し、スクリーンは河合とかぶらないよう会場右寄りの配置にしました。

2. 字幕の位置

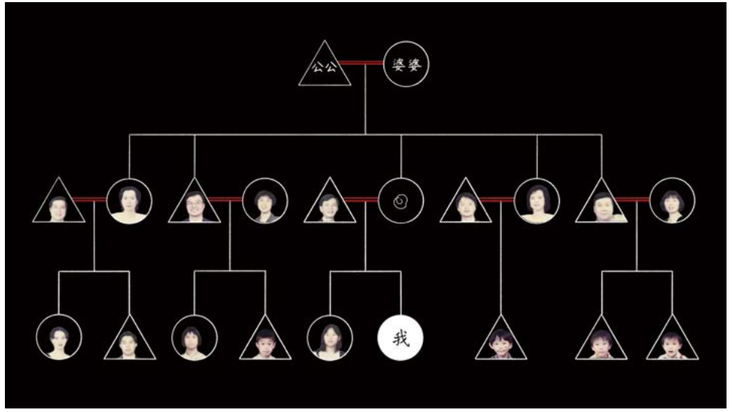
通常、字幕は映像画面の下につけることが多いですが、今回は、ジョイスが座る椅子の前面に字幕が表示されるようにすることで、鑑賞者の視点の移動を減らし、パフォーマンスを行うジョイスの言葉と字幕の一体感を持たせるように配置しました。

3. 立ち位置

ろう者・難聴者の場合には視覚情報がメインの情報となるため、聴者と同様の情報を得るためには手話とスクリーンの情報を同時に見る必要があります。今回、議論のなかでも、スクリーンのなかに手話表現者を組み込むなどの案も出ましたが、それは、作品の二次創作になってしまうという観点から、今回は不採用としました。しかし、こうしたアイデアが新しい作品や新しい情報保障の発想を生み出すきっかけになるのではないかと考えています。

作品表現を活かした翻訳方法

作品のなかで、家系図が映し出され、親族の呼び名をジョイスが広東語で順番に読み上げるシーンがあります。当初は、ジョイスと共に呼び名を広東手話で表現する方法をとっていましたが、家系図自体にそれぞれの親族の呼び名が映し出されることから、広東語の意味がわからなくても視覚的に家族構成を理解することができると考え、この部分はスクリーンへと視線誘導をすることにしました。



タイミングのずれ

本作品には、ジョイスが読み上げる台本があり、それをそのまま河合が手話で表現すると「間」のずれが生じるという課題がありました。なぜなら、台本に書かれた書記言語（日本語）から手話への変換プロセスが発生するからです（書記言語を理解する→脳内でどのような手話表現に変化するか考える→手話として表す）。そこで河合は、ジョイスの話すタイミングと手話を合わせるために、日本語から日本手話に翻訳しやすいようオリジナルの台本を作成しました。
さらに、ジョイスの話すタイミングを河合が確認できるように、めとてラボは河合専用の手話動画付きの台本も作成しました。それには書記言語だけでなくアメリカ手話や広東手話の動画も挿入し、それぞれの言語のリズムや文章も確認できるよう工夫しました。

DAY 5

ゲネプロとブラッシュアップ

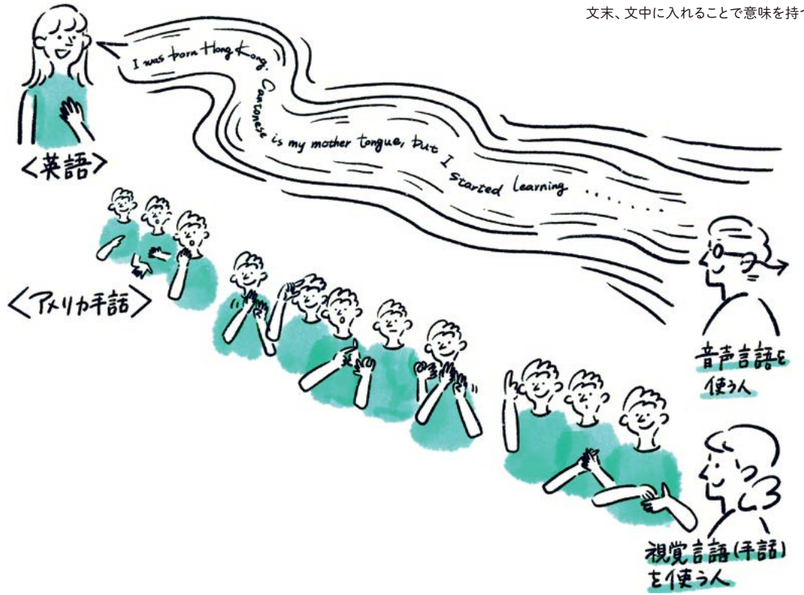
**最後の2日間はDay1～4で議論した内容を踏まえて、
レクチャーパフォーマンス本番に向けて表現の翻訳のブラッシュアップを行いました。**

身体性の翻訳のための稽古

何度も確認したのは、ジョイスの身体性を忠実に表現する方法でした。パフォーマンスでは、ジョイスは佇まいも声もあまり感情的になることはなく、淡々と一定の温度感で話します。しかし手話では、手話の文法のひとつであるNMM*（肩をすくめる・ひろげる、眉を上げる・下げる、目を見開く・細めるなど）を示す特性があるため、それらをはっきり表現してしまうとジョイスの身体性と離れてしまうという課題がありました。そのため、最低限、手話の文法は保ちつつもジョイスの身体性を壊さないように河合の手話表現を繰り返し調整しました。

また同時に、ジョイスの音声スピードに合わせるばかりではなく、河合の手話がろう者から見て違和感がないかどうかも大事です。特に英語とアメリカ手話の「間」のタイミングを合わせるのはとても困難でした。ジョイスの英語のスピードが速く、河合が表現するアメリカ手話はスペリング（指文字）が多いため、どうしても表現に時間差が出てしまいます。誰もが見て・聞いても違和感がないように、ジョイスと河合の表現のスピードをめとてラボの聴者・ろう者メンバーで確認し、調整しながら繰り返し練習を重ねました。

*NMM（Non Manual Markers=非手指標識）とは、手指以外の動作で文法的機能を持つもの。文末、文中に入れることで意味を持つ。



DAY 6

レクチャーパフォーマンス本番

パフォーマンス×ラボの集大成として、情報保障を使った公演を一般公開・上演しました。

最終日の8月6日、ついに本番。開始前から立ち見が出るほどの多くの来場者で会場は賑わっていました。
開演の冒頭に、作品と情報保障は別であること、情報保障のパフォーマンス自体は作品ではないこと、情報保障としてろう俳優の河合と字幕があること、本番では音声ガイドもつけている*ことを説明しました。これは鑑賞者に「情報保障がわからない」＝「作品そのものがわからない」という誤解を防ぐためでもあり、「パフォーマンス×ラボ」において「曖昧さ」をいかに情報保障で伝えることができるのかを目的に取り組んできたという意図を伝えるためでした。
実際、どのような情報保障をつけ、それにより作品がどのように伝わったのか。当日のレクチャーパフォーマンスの記録映像をご覧いただきながら感じ取ってみてください。

*レクチャーパフォーマンス本番時は、視覚情報に関する音声ガイドを作成し、音声ガイド付きで上演した。

レクチャーパフォーマンスの記録映像は左記のQRコードよりご覧いただけます。限定公開の資料のため、SNSなどでの拡散はお控えください。

「言葉に関する考察のトリジン」音声ガイド

本編	NO.	音声ガイド
	1	薄暗い会場。
	2	壁がスクリーンになっている。
	3	向かって右にプロジェクトがある。
	4	笠のついたスタンド型のライトで明るくなっている。
	5	向かって左の壁がわにデスク。
	6	デスクの上にはパソコンとデスクランプがあって
	7	真上にペンダントライト（電電球が一つ）がぶら下がっている。
	8	
	9	手話通訳者が入ってくる。
	10	ジョイス・ラムさんが来てデスクの前に座る。
	11	時計を外しペンダントライトをつける。
	12	会場がぼんやりと明るくなる。
今日はお越しいただきありがとうございました。	13	
	14	机の前面にろうの方への手話。

音声ガイドの資料（一部）

コラム

「翻訳」するための糸口

ジョイス・ラム

映画が好きなわたしは、小さいときからsubtitle（字幕）[1]というものは普通にあって馴染みのあるものだが、恥ずかしながらclosed caption（クローズドキャプション）[2]との違いを知ったのはわずか数年前のことだった。そのくらい、わたしは今まで情報保障のことについて何も知識を持っていなかった。情報保障をつけるものは、長尺の映画や演劇が一般的であるが、わずか15分程度の短いレクチャーパフォーマンス[3]につける前例はほぼないようだ。アート作品を伝えるためにどのような情報保障が最適なのか。それを考えるためのラボに取り組んでほしいという依頼に非常に興味を惹かれた。

《家族に関する考察のトリロジー》は漢字も使用する日本語話者に向けて制作した。日本語ではなく、あえて母語である広東語からパフォーマンスをはじめたのは、それによって、ひとつにまとまらない自分のアイデンティティ、のちに紹介する家族の定義の曖昧さを表現したいと思ったからだ。話している内容のキーワードを漢字で表示すると、日本語話者でもなんとなく理解してくれることを利用していると言えるだろう。英語字幕をつけているが、日本語と広東語の発音の微妙な違いがわからない日本語話者ではない観客には伝わらない可能性が高い。ましてや広東語話者が多くいる香港で上演する場合、まったくおもしろくない演出だと思われるだろう。

実はこの作品をつくりはじめた当初、自分の日本語の発音に対して恥ずかしい気持ちもあった。でも制作プロセスを通して、多言語が入り混じった台本を読み上げるわたしのぎこちない身体と不完全な発話は、むしろ複数的な家族形態を表現していると同時に、不確実なアイデンティティを浮き彫りにするものだと気づいた。この作品はある意味、わたしにしかできないパフォーマンスなので、通訳を入れて他人に演じてもらうことが非常に難しい作品だったに違いない。

翻訳を正しくするには、背景知識や、その言語の背景にある社会の文脈を考慮しなければならない。普通なら、鑑賞者のわかる言語に翻訳することが正しいが、異なる言語を使用して意図的につくり出したわからなさはどう翻訳すればよいだろう。実際、異なる言語の手話を教えてもらったとき、わたしのなかでは音声言語の違いに近い感覚を覚えた。パフォーマンスの冒頭で、日本語と広東語の中には発音が似ている漢字がある例として、日本語では「かぞく」、広東語では「ガーヅォッ」と発音するという話をするが、日本手話では「家族」は、両手を合わせて屋根の形を作ってから、右手の親指と小指を立てて（「人々」や男女」を表す）回す、広東手話では両手を合わせて屋根の形を作ってから、右手の5本の指を集約させながら下に移動していく動作で表す。[4] 一方で、アメリカ手話では「F」を表現するOKサインをしながら、最初に両手の親指を合わせて、親指側から小指側に回しながら輪をつくる。つまり、音声言語としても、視覚言語としても、日本語と広東語は英語より文化的な距離が近いと感じた。よって、わたしが日本語話者の観客に向かって広東語で話しかけるときにつくりたかった「わからなさ」の度合いは、手話でも同じ程度で表現できるのかと、ひとつの発見があった。

結局、使用言語に合わせて複数の翻訳者に同時通訳してもらうのではなく、河合さん一人に、日本手話に加えて、広東手話もアメリカ手話も全部覚えてもらい、河合さんに「わたし」になってもらった。「作品を壊さないよう普段通りに話して大丈夫」と言われたが、練習が重なっていくうち、目の隅に感じられる河合さんの手の動きに合わせて、速すぎず遅すぎず、最適なスピードを掴めた手応えはあった。河合さんにわたしが知っている言語を全てマスターしてもらうことはもちろん無理なことだが、何回かのリハーサルが終わったあと、河合さんにどんな気持ちで話しているのかを聞かれた。家族の物語は感情的な作品が多い気がするが、《家族に関する考察のトリロジー》のなかでは自分の家族写真の顔を切り取って、並べ直し、家系図の書き方を紹介する。さまざまな国や組織が定義する「家族」を説明するレクチャーであると同時に、時にフィクションの要素も混ざり込んでいるパフォーマンスである。わたしはあえて淡々と語る方法をとっていると、河合さんに答えた。すると河合さんは、手話もそれに伴い、肩、眉、目を動かすNMM[5]を抑えるよう調整してくれた。手話ができないわたしからはもちろんNMMについて指示することはできなかったが、作品の意図にできるだけ近づけたいという思いでわたしの顔や表情をよく観察してくれたからこそこの質問が生まれたのだと、とても感心した。

今回のラボは6日間の議論を重ねて最後に上演ということを試みたが、視覚言語のおもしろさを初めて知ったわたしにとってはまた新しい扉が開いた。この作品の芯となる（からだ）と（わからなさ）以外に今後、他のアート作品における情報保障として（何か）を翻訳する際に、この冊子が参考になれば嬉しく思う。

1 subtitleはセリフを音声トラックに合わせて画面上に表示したもの。外国語の映画の場合、観客に合わせて翻訳されたセリフが表示される。
2 セリフのほかに効果音、環境音、音楽など、音声トラックの全ての情報を文字に起こして表示したもの。
3 《家族に関する考察のトリロジー》は全編42分26秒の作品であるが、このラボでは「第一部：月編」に絞って取り組んだ。
4 日本手話と広東手話のイラストはp.8を参照。
5 非手指標識。NMMについてはp.16を参照。

コラム

パフォーマンス×ラボを振り返って

『パフォーマンス×ラボ』でジョイス・ラムの身体性の翻訳を担った河合祐三子とめとてラボの大高有紀子と保科隼希が、今回の取り組みについて共に振り返りました。

聞き手：大高有紀子（めとてラボ）／記録：保科隼希（めとてラボ）

大高　『パフォーマンス×ラボ（以下、ラボ）』の依頼があったとき、どのようなお気持ちでどんなイメージをお持ちでしたか？

河合　正直、「え？なぜわたしなの？」と思っていました。これまでも演劇などで手話語りや手話表現の経験があったので、大丈夫かなと思っていたのですが、今回の作品は想像していたものと違って。日本語だけではないんだ…!? 広東語、中国語、英語と多言語を表現するのかと思って。『ラボ』の会場に行くまでは「わたしで大丈夫なんだろうか？」という気持ちでした。

大高　ジョイスさんのレクチャーパフォーマンス作品の映像を見て、気づいたことや感じたことはありましたか？

河合　最初、わたしは普通に話を手話に翻訳すると思っていたのですが、作品映像を見たらイメージとは異なっていて。パフォーマンス自体が映像つきで、演劇的で驚きましたし、興味を持ちました。これを手話にするのか、と。

　また、作品の内容に自分の経験とリンクすることがいくつかあって。実は亡くなったわたしの父は大学で広東語を学んでいたんです。他にも、ジョイスさんの作品のなかでアジア人初の女性宇宙飛行士の向井千秋さんが登場しますよね。実は彼女の夫である向井万起男さんは以前、別の場所でつながっていた方だったので、今回の作品で向井さんが出てきて驚きましたね。そんな縁を感じる作品を手話にできる喜びと、日本語だけじゃないプレッシャーもありました。でも、結果的に受けて良かったです。

大高　作品を映像で見て、内容や表現について事前にわからない、知りたいと感じていたことはありましたか？

河合　実際にパフォーマンスのなかで話すことの裏側には何があるんだろうと知りたい気持ちがありました。言語やアイデンティティ、家族関係の話が続きますが、その表現の理由は何だろう？真意はどう思っているのだろう？と。ジョイスさんの持つ文化的背景や環境がろう者と似ているのかもしれないとも思いましたし、わたしたちろう者と同じように、言いたいことや心のなかで思っていることが違うところが似ているのではないかなと思いました。

大高　実際に『ラボ』に参加し、作品やジョイスさんの雰囲気をどのように取り込んでいきましたか？そこにはどういった工夫や課題がありましたか？

河合　『ラボ』への参加日数は少なかったのですが（※河合はDAY4～6に参加）、透明ボードの記録を見たり、ジョイスさんやめとてラボのメンバーと対話し、わたしにとって初めての世界という感覚がありました。今までいた世界とは空気が違っていて…。言葉の世界というか、不思議な気持ちでしたね。『ラボ』にもっと多く参加できていたら、また違った表現があったかもしれません。今回、二つの表現方法でどちらがよいのか不安になりました。

　一つは、ジョイスさんの身体をすべて取り込んで表現する方法。もう一つは、鑑賞者がはじめて作品を見たときに感じるであろう作品の曖昧性を、そのままに表現する方法です。

大高　「不思議な気持ち」というのは具体的にどのような気持ちだったのでしょうか？

河合　なんというか、宇宙的というのかな？わかりやすく言えば、住民票を持っていないような感覚がありました。「あれ？わたし間違ってここにいる？」というような、異なる環境に移ったときの戸惑いのような感覚がありましたね。

大高　なるほど。実は、わたしたち、めとてラボのメンバーも、最初は河合さんと同じようなことを感じていました。ジョイスさんの世界観や心のなかにたくさんのことがあるのは感じるのだけれど、それが見えなくて、わからないことばかりでした。だから、それを知りたいという気持ちが湧き出てきて議論を深めていけたように思います。

大高　『ラボ』に参加した日のなかで、一番印象に残っている日やテーマは何ですか？

河合　全部ですね（笑）。特に、レクチャーパフォーマンス本番に向けて練習しているとき、ジョイスさんの声や話し方が気になっていました。わたしが台本の文字から受け取っている言葉のニュアンスと違うような気がしたからです。文字を見てジョイスさんの感情を想像し、それが声色にも表れている

のではないかと思ったので、めとてラボの和田夏実さんに確認したところ「普通（特に感情がこもっている部分ではない）だよ」って。ここは大事なところだと思っても実際はそうでなかったり、その逆も然り。ジョイスさんの気持ちを文章から読み解くのが難しかったですね。同じ日本語でも文章と音声では、ジョイスさんとわたしの言葉の捉え方が違うんだなって。長い時間一緒に過ごしていればだんだんわかってくるのかもしれませんが。

それで、この作品を翻訳するときの視点として、わたしはジョイスさんの世界の住民として、その世界に合わせていけばよいのだなと思いました。よく文章をそのまま手話にすればいいと言われるのですが、その言葉の奥に隠れている言いたいことって何だろう？どんなことを考えているんだろう？と考えるんです。例えば、日本語で「結婚はまだ」と言う場合、それは「独身」と言っていいのか？「未婚」なのか？「結婚する必要はない」なのか？というようにいろいろな解釈が生まれるわけですが、実際は「今はとりあえず結婚は考えていない」という意味やニュアンスだったりする。こうした多様な解釈が生まれることによる疑問がわたしにはあったので、ジョイスさんに聞いたり、とにかく対話を重ねて言葉を合わせるようにしました。今回、ジョイスさんの世界を壊さないようにすることが大切で、ろうの世界を押し付けてはいけないので、ジョイスさんの世界にある彼女の意図に近い手話表現を選ぶように工夫しました。

大高　視覚言語（アメリカ手話、広東手話、日本手話）の違いについて、どのように表しましたか？

河合　アメリカ手話は、昔習っていたことがあり、今回久しぶりに使いました。広東手話については、実は以前、独学で広東語を学んでいたことがあったので、なんというか広東手話として改めて出会い直したみたいな感覚がありました。広東手話自体は、今回初めて実際に見て知り、これをわたしは使うのかという驚きがありましたね。今回は時間の都合で、手話監修者が作成してくれた広東手話の動画を覚えることしかできませんでした。本当はもっといろいろ聞いて、ブラッシュアップしたかったですね。それでも限られた時間のなかで、覚悟を決めてひたすら手話動画を繰り返し見て覚えました。

それから、わたしは日本人なのでうなずきが多いことが課題でした。以前、国際手話を勉強したとき、（日本手話と比べて文法的に）うなずきが少ないこと、日本手話はうなずきが非常に多いことを知りました。だから、今回、アメリカ手話をはじめ多言語を手話で表現するとなって、日本手話の表現要素が強く出てしまわないかということにも注意しましたね。

3言語を自分のなかに取り込むことは今までなかった経験だったので、自分のなかに3つ子がいるような気持ちで臨んでいました（笑）。

大高　うなずきが多いという日本手話の文法的な特徴も踏まえながら、パフォーマンスするときには、手話の文法を壊さないようにという調整もあったとのこと。そのあたり、どのような工夫があったのでしょうか？

河合　日本語は句読点（「、」「。」）が多いので、自然と日本手話もうなずきが多くなるんですよね。また、うなずきにはろう者特有の「間」の表現や意味もあります。アメリカ手話にもそれがあると思っていたのですが、実際に見てみると少ないということがわかりました。だから、ろう者がよりわかる「間」をどうつくろうか…と試行錯誤しましたね。CL（Classifier：物の形や質感をそのまま表す手話の表現技法）は日本手話と他の手話で共通している部分があったので、そのあたりはホッとしました。言語を取得する以上、その文化も一緒に取り込む必要があるということを、改めて本作品で強く意識しました。

大高　本番の日、鑑賞者の反応や表情はどうでしたか？

河合　緊張していたので、最初は鑑賞者をあまり見ていませんでした。やっと最後あたりで落ち着いてきたときに見てみると、鑑賞者の視線が、ジョイスさんを見ていたり、わたしのほうを見ていたりと二人を行き来していたりしましたね。なかには「あれってアメリカ手話じゃない？」「中国手話に似ている」「中国手話じゃない？広東手話？」というような反応をされている方もいて、アメリカ手話や広東手話、中国手話を知っている人もいるんだ！と驚かされましたね。

また、パフォーマンスをしているうちに、ジョイスさんと二人きりの世界に入ったような感覚があったんです。最初は「ジョイスさんがいる」という感覚から、だんだんと「ジョイスさんがいることをわたしが見ている」というように、二人の関係性を俯瞰して見ている感覚になりました。現実世界からジョイスさんとわたしの世界が分離していくような雰囲気というのかな。もし、次回も同じようにパフォーマンスをしたら、その分離した世界が何なのか、はっきりと掴めるかもしれません。

大高　つまり、河合さんからすると、ジョイスさんの身体性を取り込むことに成功したというような感じでしょうか？

河合　ジョイスさんの身体に入りかけたかも…（笑）。ジョイスさんの身体性を取り込んで翻訳できたという感覚は、今後もし回数を重ねていければわかるようになってくるかもしれませんね。

また、パフォーマンス後に、自分の身体の半分が欠けたような感覚がありました。どうしてなのかわからなかったのですが、しばらく脳内にジョイスさんの語りが残っている感覚もありましたね。これもどうしてなのかな…？きっとジョイスさんの身体の一部がわたしのなかに残っていたんでしょうかね。

大高　今回、作品の情報保障に関する実験的な取り組みをご一緒させていただきましたが、いかがでしたか？河合さんの率直なご感想を伺いたいです。

河合　本当にいい経験でしたし、やってよかったです！広東手話は手話監修者の手話がわかりやすかったおかげで、何度も確認するうちに日本手話と似てる面が多いと気づくことができたことで、表情なども表現に組み込みやすかったですね。改めて、異なる言語の手話を習得するには前もって準備が必要だということを実感できた経験でした。

大高　今回に限らず、情報保障は事前準備がとても大切ですよね。今回はとても難しいテーマの情報保障だったので、より事前の準備が必要なんだなということをわたしたちも学びました。

河合　準備しすぎも良くないですよね。バランスよくしていくことが大事ですね。

大高　もし、もう一度やるとしたら、もっと時間をかけてジョイスさんと話したり、手話監修者から対面で手話を学ぶなどチャレンジしたいですね。

河合　そうですね。もしかしたら今回とはまた違う気持ちも出てくるかもしれませんね。

保科　この冊子を読んでいる人たちへ伝えたいこと、考えてほしいことなどメッセージをいただけますか？

河合　障害を持つ人に対して配慮が増えてきて、とても良いことだと思っています。逆に「手話が必要」「字幕が必要」というよりは、コミュニケーションや伝えることを大切にしたい。今回のように、曖昧なところがあってもいいとわたしは思っています。すべてに情報保障が必要という考え方ではなく、美術館のような場の雰囲気、作品の世界を壊さないということも大切なので、曖昧さやわからなさも含めて、どのように対等にコミュニケーションを取っていくかが重要なのではないでしょうか。一番大事なのは相手を知ることなんじゃないかと思います。そしてその背景を知ること。表面だけでなく、裏側、内側のことをもっと学び、考えて欲しいと思います。

保科　最近では、音声認識やバーチャルの手話通訳がつくこともありますよね。そうした情報保障をつければ「それで良い」のではなく、人と人とのコミュニケーションを取っていくことが大事ですよね。「表だけでなく裏も」「ハード面だけでなくソフト面も」考えて、取り組んでいく必要があると思います。

保科　最後に、わたしたち、めとてラボに何かメッセージなどはありますか？

河合　めとてラボの活動を全国に広めてほしいですね！全国各地に支部があったらいいな。今後も一緒に取り組みたいです！

河合祐三子（ろう俳優）

北海道札幌市出身。フリーランスの俳優。ろう通訳者。ミナテマリ所属。2023年4月、2人組ユニット「てことば・てかなで・てあそびDuo メリマリ」を結成。 Sasa/marie（マリー）とわたしメアリー（Mary）で、サインポエム、手話遊び、サインストーリー他、サインポエトリーWS、非言語表現WS、子ども表現WSなど活動中。

おわりに

「わたしを起点に、新たな関わりの回路と表現を生み出す」。これは、めとてラボの活動コンセプトです。今回の「パフォーマンス×ラボ」は、まさにこのコンセプトを体現するような6日間でした。ジョイス・ラムというアーティストを起点に、3.5言語から生み出される表現と思考の回路をじっくりと紐解きながら視覚言語へと翻訳していく。「情報を必要とする人が情報を入手するために必要な配慮・サポートを行う」という情報保障ではなく、「ジョイスの3.5言語から構成される身体性や曖昧性を翻訳し表現する」という新しい試みは、わたしたち、めとてラボにとっても情報保障の定義が新たに更新された経験でした。

美術館や博物館にものとして残されている作品の場合は、音声ガイドや作品のキャプションによってその作品の情報をわたしたちは知ることができます。しかし、今回は、レクチャーパフォーマンスというアーティスト自身の身体、記憶、経験が作品に含まれるものであったため、作品の背景やジョイスに蓄積されてきた思考と感覚を汲み取り、その身体性を言語的な揺らぎや曖昧性を含めて見える化する情報保障への挑戦でした。

ある聴者にとってはある言葉や文化が理解できるが、一部の言葉や文化は理解できない。あるろう者にとってはある視覚言語や文化は理解できるが、一部の視覚言語や文化は理解できない。しかし、異なる音声言語・視覚言語や文化でも、自身の経験に基づいて「あ、これはわかるな」「そうか、ジョイスさんもこの経験があるんだ」と気づくことがあるでしょう。そもそも作品や芸術表現は、すべての人が理解できるというものではありません。だからこそ、鑑賞者はそれぞれが持っている思いや感覚を、この作品を通して改めて自ら気づくことがあるはずです。

本書を通し「情報保障とは何だろう？」「誰のためにあるんだろう？」という問いをじっくりと考えていただけると嬉しいです。

最後に、「パフォーマンス×ラボ」に共に取り組んでいただいたジョイス・ラムさん、ろう俳優の河合祐三子さん、手話通訳のみなさま、アメリカ手話・広東手話の手話翻訳・監修のみなさま、音声ガイド制作のみなさま、めとてラボメンバーに感謝申し上げます。そして、こうした挑戦の機会をくださったアーツカウンシル東京のみなさまに、改めて御礼申し上げます。

めとてラボ（大高有紀子、保科隼希、和田夏実、嘉原妙）

めとてラボ

「わたしを起点に、新たな関わりの回路と表現を生み出す」をコンセプトに、異なる身体性や感覚、思考を持つ人と人、人と表現が出会う機会をつくるプロジェクト。視覚言語（日本の手話）で話すろう者・難聴者、CODA（ろう者の親を持つ聴者）が主体となり、自らの感覚や言語を起点とする創発の場をつくること、また、異なる身体性や感覚世界を持つ人々と共に、新たなコミュニケーションの在り方を研究・開発することに取り組む。互いの感覚の異なりを自覚することからはじまるコミュニケーション、そうした対話を通じたからこそ育まれる表現や文化の土壌を耕すことで、思いがけない創発の可能性が拓かれていくコミュニティをつくることを目指す。（主催：東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京、一般社団法人ooo）
https://metotelab.com

ジョイス・ラム　Joyce LAM

香港生まれ、京都市在住。映像作品やレクチャーパフォーマンス、書籍の制作を通して「家族」の定義を捉え直す。国や組織が作る複数の家系図を用いた「家族に関する考察のトリロジー」を、TOKAS-Emerging 2022の個展として発表（トーキョーアーツアンドスペース本郷、2022年）、および横浜国際舞台芸術ミーティング（YPAM）フリンジ2021にて自宅で上演。近年の展覧会は「あなたが眠りにつくところ」（藤沢市アートスペース、2023）、「記憶をほどく、編み直す」（ギャラリー無量、2023）など。著書に自主出版した『生まれてきたあなたは縦単線の先にいる』（2023）がある。東京藝術大学大学院映像研究科メディア映像専攻修了。2022年度アーツコミッション・ヨコハマU39アーティスト・フェロー。アートブックをはじめ、書籍の編集者としても活動。
https://www.joycetsin.com/

本冊子は「東京アートポイント計画」が実施する「Tokyo Art Research Lab」の一環として発行しています。 東京アートポイント計画は、東京都・アーツカウンシル東京・NPOが協働し、社会に新たな価値観や、人々が自ら創造的な活動を生み出すための「アートポイント（拠点／場）」をつくる事業です。当たり前を問い直す、課題を見つける、異なる分野をつなぐ ― そうしたアートの特性をいかしたアートプロジェクトを通じて、わたしたちの暮らすまちに、個人が豊かに生きるためのよりよい関係や仕組み、コミュニティが育まれることを目指しています。
https://tarl.jp/about/tokyoartpoint

（からだ）と（わからなさ）を翻訳する
だれもが文化でつながるサマーセッション2023
「パフォーマンス×ラボ」の実験

著者・編集
めとてラボ（大高有紀子、保科隼希、和田夏実、嘉原妙）+ジョイス・ラム

イラスト
宮川幸

デザイン
芝野健太

印刷・製本
株式会社ライブアートブックス

発行日
令和6年3月21日

発行元
公益財団法人東京都歴史文化財団
アーツカウンシル東京
〒102-0073 東京都千代田区九段北4丁目1-28
九段ファーストプレイス5階
TEL 03-6256-8435

ISBN：978-4-909894-55-7 C0070

ARTS COUNCIL TOKYO

tarl TOKYO ART RESEARCH LAB